

IDP運転適性検査は、自動車、その他の機械或は機器の操作能力の獲得、或は向上に際して学習者に生じる困難、欠点を発見しようとするテストであります。

“IDP運転適性検査”は、ペーパー アンド ペンシル テスト(紙と鉛筆による検査)ですが、被検者の動作面と性格面の両面を測定し、被検者の短所を発見して警告する事を目的としています。

IDPはInstitute of Driving Psychology (運転心理研究所)の略号です。

昭和48年来の長期にわたる研究に基づいて構成されたComputerized system (コンピューター化された方式)です。

この研究の指導並びに、テストの製作監修は同志社女子大学 教授 深田尚彦氏によって行なわれて、今日に到っております。

その長所は統計化された資料の絶えざる検討によって、検査システムが監視され検討されている事です。多年にわたる莫大な量の資料(被検者の成績)が検討されるのは、コンピューターによって始めて可能なのです。又問題の妥当性についても不断に監視されていて数次にわたって基準が修正されたが、これもコンピューターによって始めて可能な仕事です。

測定される**動作的特性**は注意力、持続力、慣れの速さ、判断力、安定性で、これらはいづれも自動車運転を始めとする機器操作者には不可欠の能力です。

注意力とは「短時間にどれ程多くの事物を且つ又どれ程正確に把握するか」という能力を測るものです。

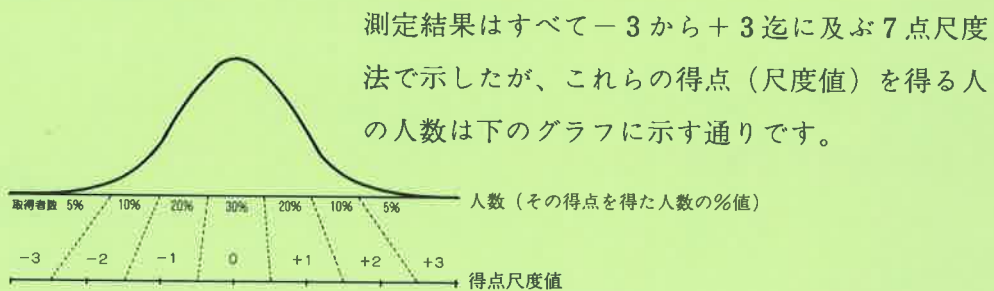
持続力とはその注意力が「時間の経過にもかかわらず低下しないか」とかを測るものです。

慣れの速さとは、人は時間の経過に従って作業量が増し、エラー（誤り）が減少するのですが、この**慣れ**の発生に長時間を要するか否かを測るものです。

判断力とは、とっさの場面で周囲の事態を迅速に見究め、冷静にその場に応じた正しい判断をえらぶ能力の有無を測るものです。

安定性とは作業継続中のエラー率の不定な動揺をさすものです。もちろん**安定性が低い**（動揺率が高い）というのは望ましいことではありません。

心理的特性として検査したのは、**短気、あせり、無責任、根気、忍耐を欠く、社交性を欠く、消極的、大胆すぎる、違法心低い、精神的不健康**の8特性についてですが、更に加えて被検者の性格を精神分裂病性、回帰性、爆発性、ヒステリー性等の性格型区分に従って分類したものです。



従って被検者はこの結果を見ると、自分の動作や性格について、多人数の中に於ける自分の能力の地位（優劣の程度）を知る事ができます。言う迄もなく**-3**は最劣でビリから5人目迄の人がとる成績であり、**-2**は10人の人がとる成績で、又これ以下の人（即ち**-3**、**-2**をとる人）は15人いる事になります。**0**は**人並、平均**の成績であり、30人がこの成績をとります。**+1**は20人の人がとる成績、**+2**は10人、**+3**は5人がとる成績となるように計算に基づいて尺度は構成されています。